みち

山には鹿の道、野には兎の道、畑にはもぐらの道、台所にはねずみの道がある。

とにかく何かが、誰かが歩いて行ったあとに道があるので、①行ったということが先で、道はあとだろう。

行く――は足を動かしてからだを前進させることだ。健康にとっては歩いて行くことなど何の苦労もいらないことだが、もしかりに草茫々の野原へいきなり置かれたとする。太陽は高いし、あちらに村の屋根は見えているし、毒虫がいるわけではなし、――なんだ、こんな草っ原、となんでもなく思うけれど、それが思いのほかというもので、足は草にからまれ、眼は草の下の土の凹凸を測れず、かなり疲労するのである。どんな小さな行為でも、行為に疲労はつきものだが、はじめに一歩を踏みだした人は、もっと大きい疲労を仕払う。そしてかすかな足跡がのこる。まず行って、そのあとが道になるのだから、②道は大勢の行った人の疲労をもって※贖われたものと言っていいかもしれぬ。

飛行機から見ると、道路はじつにはっきりと筋になって見える。地図で見る道と同じことだが、実物を縮尺で見るのだから感情がある。うねうねに、真直に、太く細く、よくもこんなにたくさんつけた道かと※感歎するが、さらにこの道を踏み固めたであろう数知らぬ自分たちの先祖のことを思うと、眼の下の道々は浮きあがってはっきりと見える。道というものには、前に希望、うしろに哀愁がある。

昨年北海道へ行って、昼間の汽車で根室へ向っていた。窓外は北海道特有の深い林が鮮明な紅葉をしていて、もったいない豪華な道であるかと思うと、たちまち一変して荒涼と、葦ばかりの原野の道となる。原野が尽きるとまた山の裾へかかる。その一ツの上り勾配の、人気もない道でトラックがとまり、運転手と助手だろう、二人きりで応急の道路修理をしていた。そのへんから伐ったらしい落葉松を敷き並べているのだが、落葉松の枝は金色に※もみじしていて、まっくろな崩れ土の上になまなまと横わっていた。一瞬に過ぎた風景だが印象に厚い。道も人も落葉松もあの人気のなさも。――

東京はそろそろ土がおちつく。私は焼跡の家に住んでもう十一年、毎年この季節には、霜で浮いた小石や瓦を庭土から拾い集める。その棄て場に困る。ふと考えて、瓦は※五分角ほどに砕き、小石と若干の土とをいっしょにうちの前の舗装道路のこわれ穴を丁寧に埋めた。小さいが善いことをしたという満足があった。自動車が来た。まったく案外だった。速力のある強靭なタイヤは、いっぺんに私の瓦と石と土を弾き飛ばして、※充塡を半分にへらして去った。

ふと考えたことぐらいでは、道は穴一ツ埋められない。③まず行く労苦も仕払わないし、穴埋めも※みんごと弾きかえされたなあ、と思う。

（幸田文『雀の手帖』新潮社　所収「みち」による）

※贖われた…ここでは何かを代償に得られたということ。　感歎…感心してほめること。
もみじして…紅葉して　五分…一寸（約三センチメートル）の半分。
充塡…あいた部分に何かをつめてふさぐこと。　みんごと…見事を強めた言い方。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「行ったということが先で、道はあとだろう」とあるが、この箇所(かしょ)が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア どこかに行くということが重要であって、どの道を通るかは重要ではないということ。

イ そこを通っていくことができる場所こそが、道ということができるのだということ。

ウ 道というものは、何か、誰かが行くという行為をしたあとにできるものだということ。

〔　　〕

(2) ——線②「道は……贖われたもの」とあるが、ここで筆者が述べようとしている内容として適当なものを選びなさい。

ア 道の中には、歩く人を疲労させるものもあるのだということ。

イ 道ができるまでには、先人たちの労苦があるのだということ。

ウ 道を楽に通るためには、十分な準備が必要だということ。

〔　　〕

(3) ——線③「まず行く労苦も……弾きかえされたなあ」とあるが、これは誰に向けられた思いか。適当なものを選びなさい。

ア 北海道で道路を二人きりで修理していた運転手と助手。

イ 筆者が埋めた瓦や石、土を弾き飛ばした自動車の運転手。

ウ 道路のこわれ穴を埋めることができなかった筆者自身。

〔　　〕